＊連載＊　設計者からみた子どもたちの豊かな空間づくり

第21回

トイレという保育空間

とも企画設計　高田桂子

■保育のあり方で便器の数も変わってくる

保育園のトイレの便器数はおよその目安があります。大便器は満2歳以上児ならおよそ15～20人に1つの便器という基準を各自治体は設けています。

トイレが混み合う時間帯は、食事後、午睡後などではないでしょうか。いっせいに子どもたちがトイレに並んでいる姿を見ます。

以前、見学に行ったA保育園で、幼児用便器数が定員に対して少ないと感じた設計者から、「便器は足りますか」と質問が出ました。しかし、保育園の答えは想像とは少し違ったものでした。

「トイレが混むことはあまりありません。私たちは保育園を大きなおうちと考えています。おうちではいっせいになにかすることもありませんから、子どもたちは保育士に声をかけて自由にトイレに行っています」「昼食時間は1時間半くらいの時間をとり、食べたくなった子どもから食べることにしています。時間に余裕があるので、トイレがいっせいに混み合う場面はあまり見かけません」という答えでした。

ひのき床材のB保育園

トイレでメダカを見る子ども

A保育園は、公立保育園を区から受託し社会福祉法人が運営しています。1階は幼児（3～5歳児の縦割り保育）、2階は乳児と分かれていますが、各階にトイレは1カ所です。便器の数は1階幼児では大便器3、小便器1です。3～5歳児の定員は59名ですから、不足と感じる数ですが、保育のあり方で便器の数は変わってくることをあらためて実感しました。

■園舎に1カ所のトイレ――子どもが子どもを育てる場

保育室とトイレの位置も、保育のあり方を現していると感じます。

千葉県のB保育園では、大規模改修工事の時に乳児棟を別棟で増築し、既存トイレも大幅に改修しました。トイレは1～5歳児で一つのトイレを使っています。職員トイレも同じ場所にあります。トイレが園舎で1カ所なのは保育園が始まってから変わっていません。乳児棟は別棟にし、1～5歳児が1カ所のトイレを使っています。園に1カ所しかトイレがないと保育士の目が届かないのではないか。排泄の様子を見て子どもの健康を観察できないのではないか、と感じるでしょう。

トイレの位置は真ん中ではなく、全体から言えば西寄りです。1・2歳児には隣接していますが、3歳児はもっとも遠い位置になっています。お昼寝から起きると3歳児は保育室を飛び出し、長い廊下をダダダと駆けています。

1・2歳時は割合ゆっくりと起きてきて、個室前の列に並んでいます。トイレの個室にはすべて扉が付いていますが、小さい子どもは扉を開け放して用を足しています。保育士用トイレもここにあり、保育士同士の情報交換の場にもなっているそうです。しかし、トイレの使い方がおぼつかない小さな子どもたちに、いつも大人がしっかりついているわけではありません。困っている子どもがいると、大きな子が助けてくれたり、大人を読んできてくれたり、といったことが自然に行われているのです。「子どもと一緒に生活をつくりだす」「子どもが子どもを育てる」「いろいろな人とつきあう中で世の中には多様な人がいることを学ぶ」などという、この園の保育の根幹となっている考え方が、トイレのあり方にも貫かれているとわかりました。

園庭から入れるトイレは便利。B保育園保護者がつくった遊具兼「そっと外トイレ」

■裸足で入れる気持ちいいトイレに

保育園の改修を検討する時に、大きなテーマになるのが「子どもたちが履き替えをしないで入れる気持ちの良いトイレにしたい」です。

築30～40年が経った園では、建替えや大幅な改修は無理でも、老朽化が目立つ水回り、せめて暗くて臭いもあるトイレを変えたいという願いは切実です。以前につくられた保育園のトイレは、当時の公立小学校のつくりにならって水で洗うタイプの床になっていて、すのこを敷いたり、サンダルに履き替えたりするところがほとんどでした。しかしその後、保育園での考え方も変化してきました。

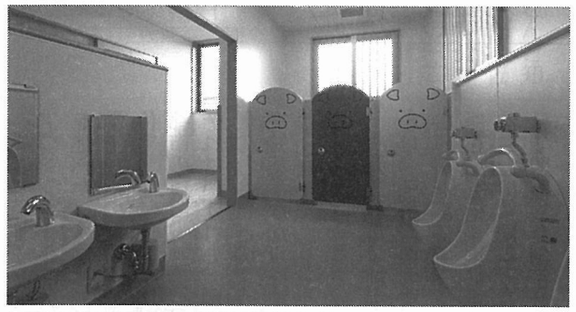
現在、新しくつくる保育園ではトイレの床はほとんどが長尺塩ビシートか、板材です。B保育園は大規模改修の際に、保育室と同じようにしっくい塗り壁と杉無垢板の腰壁で、床材はひのき無垢板敷きにしました。トイレの臭いは小便の跳ねが床や壁に染み付くのが主な要因です。B保育園では一日の掃除当番を決めこまめに掃除をしているようで、臭いは感じませんでした。

このように板材でもトイレの管理次第で臭いや材料の傷みを防ぐことができますが、拭き掃除がしやすく、板材に比べ安価であることから長尺塩ビシートは主流となっています。

長尺塩ビシートは水には強いですが、水があると滑りやすいのが難点です。最近は滑りにくいように凹凸を付けたり、分からない程度の粗い目のシートが出ていますので、選択されると良いでしょう。

多くの園のトイレは掃除がゆきとどいて清潔なだけでなく、お人形や花を飾って工夫をするなど、限られた環境の中で少しでも居心地のいい場所にしたいという保育士の願いが伝わってきます。間取りが許せば、陽差し込む明るい窓も広く取るといいでしょう。小便器が窓際に並んでいるようなところでは、外が見えるような子どもの視線になっていると気持ちよいと思います。

幼児トイレの入口は扉などで閉じず、開放的な雰囲気で入って行けると抵抗感が少なくなります。廊下や保育室と自然につながるような空間の流れをつくるとよいと思います。



廊下とつながり開放的な空間を感じるトイレ

■乳児用トイレの悩み

乳児用トイレはデリケートです。清潔不潔がきちんと整理されていないと感染が広まってしまいます。その上、広さに対してオムツ入れや汚物流し、沐浴槽など必要な物が多くあります。

ある保育園では、調理室と調乳室が位置的につながり、流れがとてもスムーズに造られています。その流れで0歳児の子どもたちが食事をする場所が決まってくるのですが、ちょうど沐浴室・汚物流しの前になってしまいます。おそらく設計段階では、食事をする場所は奥に広がっている保育室でと想定していたと思います。

公立保育園の運営を民間受託したある保育園では、乳児トイレ室が狭くオムツ替えやその備品がトイレではできず、保育室で行うようなつくりになっていました。そこでトイレの入口前に柵で緩衝帯を造り、子どもたちが保育室から直接トイレやオムツ替えの場所に入らないような工夫を、保育士たちが徐々に整備したそうです。

乳児室トイレは設備がたくさん

設計は、その園の保育方針を聞き取りながら、保育士さんたちの考え方や願いを「形」にしていく行為ですので、保育のあり方によって、建物のあり方やトイレのあり方はそれぞれ異なったものになっていきます。ですから、どういうトイレが正解で、どうつくればいいトイレができるというマニュアルはないと感じています。

トイレは一度つくってしまうと変更を加えるのは難しいです。でも、小さな工夫から大きな改修まで、トイレは変えられるものです。そして、どんなトイレが欲しいかは、どんな保育をしたいか、ということにつながっています。改修の際には保育を関係者全員で見直し、トイレのあり方についても、これまで通りで本当にいいかを問いかける機会をつくって欲しいと思っています。